



TITLE:

渡歐日記(第一信)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

CITATION:

寺田, 貞次. 渡歐日記(第一信). 地球 1924, 2(2): 349-359

ISSUE DATE:

1924-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182725>

RIGHT:

渡 歐 日 記 (第一信)

寺 田 貞 次

私か此度商業地理研究の爲め文部省在外研究員として歐米に二ヶ年間に留を命ぜられましたに付き、着歐迄の消息を通知せよとの御厚意に接しましたが、私の渡歐たる單に本邦の船に乗て参るのであつて、別に調査をするのでもなければ探險をするのでもないから、事新しく御報導申すだけの價值があるか否やは素より疑問であります。世間は刻々進歩變遷して行きますから、旅行記の如きは同じ處を何回記して置いても無用でなからう、又以前の旅行記と比較研究の資にもなるであらうと思ひますので、拙き筆を走らす事にしました。

私の今度の目的は商業地理の研究と云ふ事になつて居りますが、實は自分の好む人文地理學經濟地理學の方面を調べて見度いと思つて居ますので、之に付ては從來から單に参考書の上許でなく出来るだけ實地に付て經驗を重ねて參考資料を得たいと存じ、毎年何處かを視察する事に致し或は浦鹽に或は浦鹽より哈爾濱を経て滿洲に、或は間宮林蔵其他の跡を研めんとして北樺太より黑龍江を溯りて哈府に出て、或は北海道漁業家の厚意を得て勘察を加へ視察し、或は歐洲大戰の結果獨領南洋諸島占領の際には御

用船の便乗を得て、これを視察致す等年々どこかに出かけ北方寒地と南方熱地の状態とは略ぼ理解し得るに至りました。然し文化の根元をなす肝心の温帯地方の状態は不幸にして未だ充分に之を知る機を得ませず遺憾に存じて居ました、此度漸く出發する事になりましたから今迄私の觀なかつた部分を充分に觀察して参り度いと考へて居ります。

前途の如く旅行は時々やりましたが歐米の大旅行となりまして、相當の準備を要します。之は自己の考のみではいけません。是非とも經驗者に聞く要があります。私も最近歸朝の方々に就て御教示を乞ふた、在外研究員でなく、實業家等にも御尋ねしましたが、矢張り目的が異ひますから自分等の旅行には不適當な點が多い、在外研究員は研究員か若しくは之に近い視察者に聞かれれば適切でない、私は小樽では教授吉米地英俊氏、京都では京大助教西田直二郎氏等を始め數氏に聞きました。幸懇切なる御教示を得、便宜を得ました。斯る御指導は在外研究員が拜命毎にくりかへす質問で、今後さても屢々起る事と思ひますから徒になかく貴紙をけがす恐はありますけれども將來の

參考迄、諸氏より承知した準備法を御話申す事にします。

先づ出立の際是非必要な準備は旅券の査証と船床の豫約とであります。歐洲の方に行く場合は西比利亞通過と、海路とであります。(亞米利加經由を含めず)西比利亞通過の方も現今では漸次秩序回復したので通過し得る様になつて居り日數も少く、旅費も僅かで行けるから、之にせよ或る露人はすゝめてくれましたが、尙困難も少くないと思ひましたので海路を取る事にしました。海路では大阪商船日本郵船と何れかを撰ばればなりませぬ、大阪商船の方は所謂カーゴで荷物を主として居ますから大連迄廻り日數も郵船に比べて約廿日もながくかゝります。但し船貨は郵船に比して安く、英國迄一等で八百圓であり、船客も少いから氣樂です。寄航もながいから、視察を主とする者には不適であります。日本郵船の方は客船でありますからして、大連等廻らず直に上海に來り航海日數も英國倫敦迄五十日かゝりませぬ、海上の旅行は随分たくつてありますからして此方を撰ぶのは單に出立を飾るさか云ふ名譽心を除いてもよい事です。私は實は友人の都合もあり大阪商船に乗る豫定でありましたが、風邪の爲め變更郵船に乗る事になり、四月廿七日神戸解纜香取丸に定めしました。

因乗船を定めるには普通船床豫約をやります、此の豫約はなる可く早い方がよいと申しますが勿論乗客の多少に原因するもので俄に申込でも満員の節は乗船不可能の恐があるからです。故に船床豫約は何ヶ月前にしなければならぬ等と定て居るもので、勿論ありませぬ、船床豫約は社則で汽船貨の三分の二を前

納することにやつて居ます、即大阪商船ならば壹等八百圓に對して三分二、即二百六拾圓を、郵船ならば留學生は運賃の壹割五分を引てくれますから、壹等壹千圓として壹割五分減の八百五十圓に對する三分ノ二を前納すれば宜しい、然し郵船は磅計算ですから英國爲替の變動は運賃の多少に直接影響を與へます、出立の際には外國爲替に留意する要があります。私の時は大震災の影響で日本金下落した時で、損である上に、米國の排日問題で暴落を示した時で非常に不利でした、汽船貨拂込は出帆間際で宜しいが會社では旅券と在外研究員證明(文部省より交附のもの)を調べますから旅券の整備はなるべく早くして置く要があります。旅券の整備とは通過地諸國の領事の査証を受け置く事で、此の査証がないと通用しませぬ、歐航では通過地が大部分英領であり、マルセイユ上陸の場合もありますから、之に應ずる國の領事館に出頭して査証を受けるのです。査証は役所の都合で割合に時間を要する事もありますから、出帆間際と云はず少し早く受けて置く方が安心です。査証には料金を徴します。料金は國に依て異り、英國は四圓、佛國は九圓四、五拾錢でした獨國等は尙高率の様に聞きました。乗船の重なる準備は之で宜しいが、扱て荷物をつくるさなるさ色々の考慮を要します。

衣服から見ますに、男子の場合で申すのですが、船中では外人に對し見苦しくない範圍に於て服裝を整へるのであります。尤も等級に依て異ひます。客船は壹等を目的とし、貳等等は殆ど附屬の様なもので、其間の懸隔は非常なものです。以前留學

出等は試等に乘る者は多かつた様ですが、長途の旅には是非並等にする方が便宜と考へます、夫で壹等船客の場合として申しますが、航海中は勿論洋服を着用する用があります、日本人で日本の船に乗るのであるから和洋で宜しいと云ふ理屈も立ちますが、その理屈のみにも行かない様です、但中途になると和服を着用する人も無いではありませんが、其場合は外人に對し品位を保ち得るだけの衣服で、羽織袴を用ふる要があり、洋服よりも反て不便になります、香取丸では運動家の日比野寛氏が紋付袴で日本風を發揮し、本永醫學博士、社會局事務官君島海吉氏が和服で食堂に出た例もありましたが必ずしも奇を裝ふ要もありません、故に平常着用の洋服を着用すれば充分です、從來食堂に出る時は禮儀上モーニング・及スモーキンギヤツケト着用を要する等申しましたが現今は歐人の方が日本船に乗る時は之を着用しない様に遠慮したのか、日本人が着用しない事にしたのかどちらか知れませぬが兎に角餘り着用しませぬ、香取丸では三井高公氏や岸博士が着用した位のもので他は皆脊廣のまゝでして、洋服の色合も一定せず何でもかまはない但黒色なれば最穩當でよい様に考へられました、故に洋服は極く汚れて居ない限りは平素着用の服で結構です、然らば海外在留中はどうか申すと、日本で多く用ゐるフロツクは絶対に必要がない時には宴會とか集會とか種類の場所に出席を要する事であります、其時には或は燕尾服を要する事もあるそうですから、所持の方は持參するもよいと思ひます。斯う云ふ風ですから、洋服は別に新調を要しない、歐洲の方は日本に比べますれば洋服

波 歐 日 記

は品質もよく價格も低廉でありまうからかうして滞在中に新調すれば宜しい、之は誰人の説も一致して居ますから私も其説に従ひ新調等控えました、然し渡歐には船は熱帯を通過します、香港以南印度洋からボートサイダ邊迄は年中暑くありますから夏服に着かへる要があります、之れも別に制限はありません、黒色であれば穩當だ等と聞きましたが必ずしも黒でなくとも何でもよろしい、白色の夏服は多く用られます、但し形は脊廣を適當とします、つめ襟では食堂には遠慮を要します、而熱帯通過の間は約廿日もあつて永くありますからして少くとも二三着用意を要します、但之は全部出立の際用意なくとも香港邊では日本に比し低廉でよい夏服が求められますから、途中で準備する人もあります、香取の乗客中或る人は香港で求めましたが白服で七圓五拾錢然もよく似合ひました、日本ではどんな夏服でも拾圓以下では出来ないこの話でした。

次に婦人服に付て觀ますに、香取乗客中にも奥様御同伴の方が二三ありました、三井高公氏岸博士、伊東愛吉氏の如き夫でありました、三井令夫人は最初から洋裝でしたが、他は出發の際は和服で、上海、香港と次第に洋裝に着かへられまして、歐婦人等は食堂に出る度毎に着かへる様な感もします、が私は婦人服に付ては自分として必要がないから唯觀察だけ記して置きました、若し婦人が和服のまゝでいかないとするならば婦人の乗船は却々面倒な事と云はなければなりません、和服の話の序に今一度男子の和服に付て申しますが前述の如く黒紋付等は別に要しない、特に日本服を要求せられる場合に準備があれば

都合がよい位な事で、夫とても必ずしも紋付を着用せねばならぬ事もないのでありますから、此等を用意に及びませぬ、然し滯在中とても洋服でなければ外に出られぬと云ふ制限はないから滯在中和服で過してもよいでないかと云ふ疑問も起りますが日本服常用は手数がかり又不經濟で到底よくなし得られるものでないと思ますから、此等は別に學ぶ必要はないと思ます、結局紋付、等禮服は不要となり、然し下宿に居る時は和服でくつろぐのも愉快でありますから、歐人の見て見苦しくない程度の和服を用意するが宜しい、西田氏は大島の着物位が丁度適當だと云ふて居られました、船中では就寢には和服がよろしい、之が爲にネルの寢衣、並に湯衣を用意する要があります、湯衣は荒い縞模様のものが適當と聞ききました、之は數枚用意し汗づけは直に洗濯させる要があります、タオル製の寢衣は殊に便利です、又下宿屋で打ちくつろぐ爲にはドテラが適當だと申します、之は是非準備を要するもので、誰に聞てもドテラをすゝめない方はありません、過日も在倫敦の學友八木又三氏が畫面をよこして、準備に付ての注意をしてくれられ夫にはドテラが書てあり「ドテラ」は日本で聞て來ました以上に氣持のよいものだから是非忘れない様にせよとの事でした。

衣服の附屬品としては帽子は普通の中折で宜しい山高帽等は絶対に不要、船中で甲板に出るには帽子着用を要します、然し中折では不便ですから皆島打帽を用ゐます、私は平素此帽を用ゐなかつたが己を得ず求めました、燕尾服の時はシルクハットを要しますが特別の場合ですから必要に應じて求めれば宜しい、

靴は着用を要します、褐色靴が多く用られ、夏服になる白靴も多く用られます、但し黒靴にても差支はありません、靴の代用に半靴式のスリッパを用ゐます、輕便で宜しいから日本から準備するなり、然もなくは上海邊で求めるが宜しい、普通のスリッパは使用しませぬし又之では食堂に出る事は遠慮を要します、カラーは不潔を嫌ひますから多數用意するが宜しい、ソフト・カラーは何となく樂ですから多く用られます、船には洗濯人が居りますから不自由はありませんが自分で洗て使用する便もあつて好都合です、ワイ襯も多數準備するが便です、白色のものゝみでなく、縞模様の品も準備するが宜しい、齒磨、揚子石鹼、又人に依ては頭髮用油、櫛等は寄航毎に賣りに來ますけれども準備して置が宜しい、鏡は船内には裝置してありますから必要を認めませぬ、ひげ剃は船中に床屋が出張して居りますので散髪は壹圓五拾錢で高價ですから、ひげ等自分で剃る要があります、之は習慣上日本剃は不便さは申しませぬが先づ安全剃か機械剃を用ふるが便利です、此等諸品を一まとめにせる革製の化粧箱が賣てありますが大に便利と思ひます。

旅行中一寸して病氣の用意に醫藥を準備する要があります、例へば切傷の爲めのバンソー膏、養命膏の類、又仁丹、寶丹の類、風邪の爲のアスピリン、等の如きもので、又將に自分に適した整腸劑とか風邪藥等は醫師に調劑してもらつて携帯するも宜しい、又旅行地に依りましては、乗船の際に豫防法を講じて置く要のある事もあります、例へば痘瘡の様なものゝ流行地を通過の場合には豫防の爲め種痘を施して行くの類であります、歐

洲航路では上海、香港は痘瘡の流行地ですから種痘をする要があります、私の時は香港着前に船客一同に種痘を施しました、熱帯に参りますマラリヤがありますが寄航地では新嘉坡、コロホ等市内では餘りないと申しますから、蚊に注意するが宜しい、コロホ以西には悪疫はありませぬから先づ安神する事が出来、又不眠症に罹る事も有勝と申す、カルモチンを用意するもよいと聞きました、星の腸胃藥、太田の胃散の如き準備するには適當です、船中は終日洋食で最初は一寸口當りがよいが、香港以後は漸次暑くなりますので腸胃の弱れる處へ、腹冷等が加つて下痢を起す事が多くあります、香取丸では香港發頃からそろ／＼下痢が流行し出しました、岸博士、徳岡博士等も少々弱られた、腸胃藥は是非必要です。

滞在中一寸世話になつた人等に謝禮の必要が起ります其には差したるものを遣はす用はない手帳で滞在地にはない品を遣はせば喜ばれます、要は純日本製品を用意すればよいと云ふ事になります、以前はよく日本の繪葉書殊に廣重の江戸繪の繪葉書の類を用意する人もありましたが、夫よりも京都ならば四條通邊に賣つて居る京人形(小形で一個一、二圓のもの)小箱縮緬小片、絹扇子婦人用小形、漆器の葉書入箱の類を撰ぶが宜しい、此等は極く一片の謝禮用ですが、少し手厚く謝禮を要する様な場品には絹布片の如きものは適當だと承りました、婦人の胸邊にかける絹布で高島屋等に注文せば一枚拾圓程で求める事が出来、又西田氏等は滞在中ホケットに日本の古切手、又は五錢白銅等を用意して置いて子供に道を教はつたとか云ふ様な場合

に興へる、向ふの人はかゝる品に趣味を以て居る者が多くて喜ばれたと申して居られました、誠によい考と思ひました、又滞在那人の土産として何の菓子でも携帯を欲する場合に熱帯國通過中腐敗しない物を撰ばねばなりません、京都ならば駿河屋の罐詰梨ようかんの如きものが宜しい、船中では食事以外に午後三時には御茶が出ます、菓子も附て居まして、菓子等用意する要は殆どありません、若し準備するならば反てあられた様なものが珍しくてよいと聞きまして、私も少し準備はしましたが事實上食し得られるものでなく、熱帯に入りますと變質しますから必ずしも準備の要を認めませぬ。

持參の金は人に依て一概には申せぬ事です、先づ着歐迄の費用、着後の準備金を區別して見る要があります、着歐迄の費用は船中での費用と寄航地での費用とを含みます、船中の費用は最大きいはボーイに對するチップであります、之は普通汽船賃の壹割と云ふ事に略定て居ます、即ち壹等船客ならば先づ百圓位に當ります、尤ボーイは船室、食卓、並にデッキ、湯殿附ボーイに興へ總額です、此他は洗濯代、切手代等で酒舖等でビール、サイダー等を飲用したり、病氣にて船醫の厄介になつた時は例外です、寄航地での費用は上陸宿泊の場合、旅行地の如何等に於て一定しませぬが大抵三、四百圓位用意して置けばよいと承知しましたので、先づ三百圓は正金銀行で英磅に兩替し、他は日本金で用意しました、荷着の上は文部省からの送金が一、二ヶ月もおくれ勝になるから其間の準備金を要すると承知約一、二ヶ月分用意する事にしました、一ヶ月は英國で約三

十磅を要するものと観て準備すれば宜しい之は正金銀行なり、在英の銀行小分手で持参すれば宜しい、然し出張等で歐米渡遊の場合或は滯在中附近を旅行する場合に旅費は現金にて持参は危険が多いから信用狀にして持参すべきであります、正金、臺灣、佐友等の銀行に依頼すれば宜しい。

次に此等準備品は何に容れて持参するか、よく特別に歸朝者が持て歸る様な大トランクや大箱を求める人もありますが、斯る容器は日本では非常に高價です、文部省在外研究員の様な旅費の少い者がそんなものを求めて居つては旅券は無くなつてしまふ、然し荷物の送付には右の品は最適當であるから着後求めて不要品等を送りかへす用に供するが得策である、出立の際に何に容れて行つても別に耻辱でもない、出立の際には出来るだけ數多く持たない方がよいと云ふので私も其方針を取つて苦米地氏は出立の際例の大トランクを求めた人だが今聞て見るに求めない方がよいと云はれ、西田氏はスーツケース、と大形行李の三個にしたと聞きましたので私も此範を出ない様にしました、而三個中行季は船中で必要でない品を入れて若し船室に收容困難なれば荷物室に預ける様にしまつた、而し荷物は乗船前日位に瀛船専門の運送店に依頼しますれば積込んでくれます。

先づ出立の準備はこんな事でした、私の出立に際し東京の高濱盧子先生が手紙を下して、

甚平も用意召されよ夏衣

その一句を添へられました、誠にさ今更ながら考へて居ます着後如何すべきか之は其人の目的に依て一様でなく、中日

覺氏が其の渡歐日記の緒言に云ふて居られる様に其の心得は十人十色ではありますけれども矢張經驗ある先輩に聞て罷とするの宜がしいので此處では別に述べませぬ、先づこんな風で、四月廿七日朝七時十五分京都發で出發しました、京都大學地學教室の藤田元春、小牧實繁兩氏、風俗研究會の江馬淳風氏等の御見送を受け豫定の通り十時神戸港第四突堤繫船の香取丸に乗り込みました、家族共並に親戚の者は既に余の船室で待ち受て居ました、恩師石橋五郎先生わざ／＼御見送下され旅中の御注意迄も下され感謝致しました、此船には近くヤエネープで開催の國際勞働會議出席の日本政府代表、並に勞働者組合代表並に巴里で催さる、オリンピック撰手の來船があつたので見送人殊に多く雑踏を極めました、其の盛況は當日の紙上掲載の通りであります、折しも天氣快晴船は豫定の如く正午を以て解纜しました、港外迄見送る小漁船並に飛行機で自分共も今更ながら袂別の異感を忘れました、本日乗船の諸氏は今後記事中にあらはれますから參考までに重なる人を左に列記致します。

國際勞働會議資本家代表上遠野常之助、同顧問阪部二郎、同石丸優三、政府代表河原田稼吉、同顧問古瀬安俊、同君島清吉、勞働代表鈴木文治、同顧問米窪滿亮、同川村保太次、法學博士織田萬、三井高公、同夫人、東北大學教授三枝彦雄、正金副支配人伊東愛吉、北大教授農學博士星野勇三、京都府立醫科大學教授醫學博士本永七三郎、愛知醫科大學教授醫學博士小口忠太、倉敷病院長醫學博士徳岡英、名古屋育英學校長日比野寛、體育教育會長岸清一、同夫人、同選手金栗四三、等數氏、

内海の航海は極く静寂に二十八日朝門司に着此處では航海中の石炭を積み込むので一日碇泊します、船客は夫々上陸、夜も船に歸るもあり、陸に宿するもあり思々です、私も學校の卒業生共が迎へて来てくれましたので宿泊しました、船に歸た人の話に依りますと石炭積込の音で熟睡が出来なかつた云ふ事です、此處から乗船する人も少くありませぬ私の船室は定員三名で神戸出帆の時私一人でしたが、此處で藤音得忍氏が乗船せられた、氏は本願寺の關係者で京大法科出身であり、京都に縁故ある方とて話もよく合て愉快でした、船中ではからずも七高時代の學友木村篤太郎氏に出會た、體育協會會長岸博士を見送の爲め門司迄便乗したのもらしい、岸博士に紹介された、又同七高出身の石丸優三氏にも出會た氏は資本代表の顧問として渡歐さるゝのである、思はざる人に出會ふ未だ他にも誰が乗船して居るか知れないと思ふと、船さ云ふものは面白いものである。

廿九日、晴、小樽高商關門同窓會幹事諸君の見送を得て、鈴木勞働代表等と同ランチで歸船々内は神戸に於けると同様、新乗船者並に見送人、各代表等の見送等で混雜を極めて居る、徳岡博士見送の爲に來船中の勝谷工學士に會した、君は七高時代寄宿生活を共にした人で久振に面會した但出帆間際で碌に話も出来なかつたのは遺憾であつた、快晴ではあるが關門は西風強く白波が高い船は豫定の如く正后出帆、倉本邦の景色を後にする事となつた、關門を出るに所謂玄海灘此の白波では如何と心配して居たが意外にも靜穩々頃迄左右に烏々を眺めつゝ進だ、夕頃から船は向ひ風になり漸次強くなる様な感じがした、然し船は

別に動搖もせず、勿論気分もかはらなかつた。

三十日、雨、昨夜は出立間際の疲勞でよく睡た、夜中眼をさますと船はだいたいふん動搖して居る、好奇にも甲板に出て見る、暗黒なる海に風雨物凄である、後に聞と少々低氣壓であつた音に聞く玄海だから此位の事はと覺悟はして居るもの、乗船最初の動搖とて氣分勝れず朝食は遂に欠禮した、私の食卓は小口徳岡、本永諸博士並に日本生命保險の渡邊氏でありましたが、今朝出席は小口、徳岡兩氏のみであり、一體に今朝の食堂はさみしかつた云ふ事でした、上海間には一時間の時差がありますから夜には揭示が出て時計をなほします、之は旅行の際には實際の經驗になつて結構です、晝頃から天候回復、波も靜になり夜には早くも揚子江口に近づき、水は褐色に變じ、眞に黃海を現出しました、濁水遙に江口二百哩に及ぶとは大河作用の偉大なるに驚かざるを得ませなんだ。

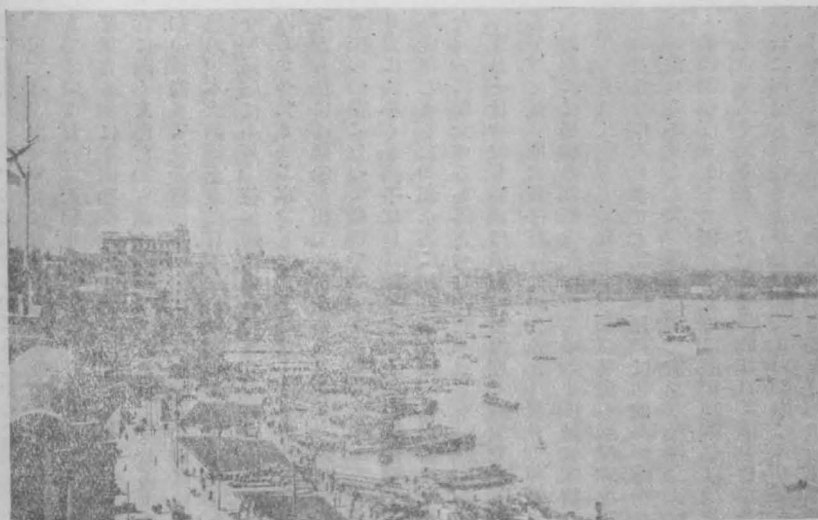
五月一日、波も靜かに船室内の温度も適宜であるので熟睡眼を覺す、船は既に揚子江をだいたいふん上て居り、相變らずの濁水の向ふには揚柳の低平な土地が島の如くに見えて居る、やがて兩岸も見えて河らしくなる、船は吳淞の處で本流を辭して支流の黃浦江に入ります、其の境目には防波堤が築かれ汽船數船の碇泊せるを見ました、所謂吳淞で右岸に吳淞の人家を眺めつゝ、船は尙のぼります、河の港だけに潮汐の關係は餘程航行の關係あるらしく聞きました、先年黑龍江口に潮汐の都合で長時間河口に停船したのと思ひ合はせてよい經驗になりました、朝の食事をして居る中に愈上海港に着しました、市街は黃浦江の右

岸に發達して居り、河は之を上から十區に區別して香取丸は其九區邊に投錨しました、船は三日出帆で中一日の餘裕がありますから、乗客は夫々上陸思々の行動を取ります。

最初のランチで郵船勤務の小樽高商同窓會員永井伊助君を始め迎へに来てくれました、海外に出で知人に出會ふ程うれしいものは無い殊に正服姿より眼に残る卒業生の其發展振を見るのは殊に喜びの度を増すものであります、私は小口、徳岡、本永、渡邊諸氏の一行に加はり永井君の案内で兩岸の景色を眺めつゝ、税關の處で上陸しました、聞え左岸は黃浦と稱して、ドック工場等は在りますが市街の發達はない、上海市街は皆右岸で大厦高樓立ち並で居ます、上陸一先づ豐陽館と云ふ日本人經營の旅館に落付ました、旅館は税關の上陸地點より少し下流に在るので海岸に沿て少しもどる事になります、税關を出ると直ぐ前に英國領事館があります、流石英國の勢力地とて最好の位置を保て居る事が知れます、其前方海岸で蘇州河の合流點は公園(Public Garden)になつて居ます、東京日比谷公園式で花草咲き整ひ美觀を呈して居ました、支那人の人園を許さない、支那人で入園權を有するは樺母のみである、

蘇州河に架する鐵橋大阪の天満橋式で Garden Bridge といふ橋を渡る、海岸には日本郵船の建物を始め我が領事館等が並で居り此邊から北へは日本人が多く居る區域をなして居ます、やがて旅館に着きました。

上海には日本人經營の旅館は多くあります、豐陽館は普通宿泊に便利な場所で上海虹口西華路五號に在ります、和洋折衷に設



上海市街

備され清潔です。から宿泊には心持がよく、茶代廢止で便利です。私共は一室二名で宿泊料五弗でした、室の善悪によつて七八弗の場合もあります、上海の見物は目的に依り異り工場縱覽等特殊の場合もありますが、普通は市内の見物と上海附近の名蹟を訪ふ位です。名蹟では南京、杭州等場所は多いですが手近で多く人の参るのは蘇州の見物です、一行も午後市内を見物、明日蘇州行き定めました、鈴木商店の衣裳申造君が案内してやらうと云ふので一行と別れ自動車で見物した。

先づ日本人の多く居る區域を觀、町はずれの新公園 Hongkew Park に至る、公園は一面の芝生で別に池水の美はないけれども廣漠運動には好適で庭球・ゴルフの如き盛に稽古される由、附近には邦人の住宅多く、日本人小學校は此邊に在ります、日本人の住宅中、衣斐君の住宅を觀せてもらつた、社宅で洋風建築で一建築で三軒位に別れて居ました、周圍に花園を控へ二階建て階上には和式で階下は洋式に設備し、食堂の備もあり、滿洲邊の社宅と異らず、相當の生活振を示して居ます、下女として支那婦人を使用して居る通勤制でよく働くやうです、上海は一體に物價は安い、一箇月百圓もあれば相當な生活は出来ると聞きました、然し家賃は決して安くない衣斐君の家等も家賃は八十圓許です、上海は人力車馬車が非常に多い、其他純支那式の運送器も多數ある、多數あるだけに賃錢は非常に安い、人力車は一哩に付十錢程度であり、朝夕送り迎へをして十弗位で御かへ、車が置ける有様、家内共の買物にも車に乗ると云ふ有様ですなる程極端に車の數は多くても車賃は安いから誰でも車に乗る

乗車の數が多いから人力車も引き合せて行く、日本人人力車は多くない其の代り賃銀は高い從て乗車も少い、結局人力車は立て行き難いなる、支那人の方が矢張り商賈じやうすか。

道を返し蘇州河畔を海岸大通に出る、蘇州河は蘇州より流れて上海市の處で黃浦江に注ぐ河で大河ではないが支那帆船の往來繁多である上海への物資は重に此河で運ばれるもので物資出迪の時期には河川は船を以て充つるの盛況を呈す、再 Canal Bridge を渡り海岸を走る英領事館を始め日本の建物では正金銀行臺灣銀行等大建築物が相並んで居ます、各説明を聞たが到底覚えられなんだ、英佛租界の境界の處海岸に接して新設記念碑が眼についた、去る三月に出来上たもので歐洲大戦平和記念塔でありました、佛租界に入り支那舊市街との境を通る舊市街はもと圓形の城壁を圍らして居たが今は取崩され跡をさぞむるのみとなつて居ます、町幅は狹隘不潔で如何にも惡疫の巢窟の様な感にうたれます、其の南部を南市と申し綿花の取扱盛な區域をなして居ます、南市棉北市棉の名稱も此邊に發しますが詳しく解る機會を得ず遺憾でした、再佛租界にもざり廣い並樹の遠く連れる、アスファルトの街を走る、今の支那町と比し壯快云はん方なしです、市の西南郊外なるジュエスフィールド公園 (Jules Field Park) に着、平坦な田園の間に設けられた大公園で規模の大なる新公園の比でない、一面の芝生で綠樹所々に茂り少許さ離池水をも觀、運動其の他、音樂堂の設も在り、洋人の三々五々園内のテニスを圍んで持參の辦當をひろげ居るも愉快氣に見受ました、日本人等も時々遊園するが園内を汚すのでいやがられる

と申して居ましたが、日本人の習俗として改良を要すべき點であります、裏門を出て附近に在る東亞同文書院を訪ふた、其の名は兼て聞て居り其支那調査報告は常に觀た處であるので敬意を表したのであります、校舎、圖書館寄宿舎等完備して居ます寄宿舎の如き一ヶ月の賄費九弗と聞きました、我國の一ヶ月二



和平紀念塔

築物で京都邊では之だけのものは見られない、支那人經營ではあんが流石規模大である樓上は天韵樓と稱し、休憩所、芝居、話し等がある、大阪の新世界と同じもので、上海市内を一目の中に見る事が出来ず、市内の見物は之を切上として旅館に歸る、一行も既に見物を終へて歸て居た夜は日本人クラブで在上

十圓近く要するに比し安いのに驚きました。

再祖界にかへり南京路と稱する大通に出て四馬路と云ふ雑踏の街路を過ぎ、上海での有名な大競馬場等を觀、春秋二回の大競馬には、大威金を夢見せしめる等と聞かされつゝ、當市の、department store なる永安公司を縦覽す、先施公司と相並で大建

深く渡渉を要しませぬ、且其屈曲點は西から蘇州河が流入して居り蘇州河は上海奥地の農産地を流れるので上海で必要な物資は此河で此處に集散します、此關係上此屈曲點が商港として利用されたもので、上海中此地點が最重要な商業地域となして居ます、夫で市街は此河の右岸で西岸及北岸に發達し西岸には南

海小樽高商同窓會が歡迎會を開てくれる、集る者十數名開校日尙淺き學校ながら發展の割合盛なるに喜ばされた、大廣間には東北大學助教授三枝理學博士の相對性原理に關する講演があつた。上海の見物は單に之れだけで未だ概念を得るに至りませぬが要するに上海は河の港で人文地學上河川の港は流水作用を應用して河の屈曲點(Bend)に發達すを申す其一例に相當して居り上海は楊子江の支流黃浦江の南より東に曲る處に發達して居ます、其屈曲點は丁度日本郵船會社の占領する處で、河水は常に

部に支那舊市街あり、其北は新しく開けた町で外人の居留地をなし舊市街の直ぐ北が佛租界其他が英米日等の共同租界となつて居ます、共同租界の東部は工業地區で紡績業を始め工業が發達して居り、蘇州河西岸が商業地域其北部が住宅地區をなして居ます、租界は佛租界と共同租界とに依て趣を異にし、共同租界は活動活潑であるに反して、佛租界は比較的劣て觀え、建築物の如きも共同租界の顯著なる増加に比し佛租界は沈滞の狀況を示して居る、蓋施政上の原因其重なるのであらう、人口は相變らず支那側の統計不備で確知出来ないさうですが、舊市街の人口は確に稠密で、雖一帖に五・六人に相當すと觀察されて居るさうで、總人口は百五十萬乃至二百萬と申して居ます、此中邦人二萬、白人七千と稱します。

港に付きましては色々研究されて居ますので日本では廣井博士等の御研究もあるさうです、要するに、上海は河港 (River Port) でありましてからして流水作用、及潮汐作用に依て其價值が變化される理です、流水作用は自然地學の説く通で此港では南から来る水は蘇州河合流點日本郵船會社の所在地に突當て東に折れるので此屈曲點は常に水深を保ち、其反對の側は土砂埋積水淺くなる、流水は再東流左岸の或る部分に突當り其地點は水深きも反對側は淺くなると云ふ風で同河岸でも場所に依て水深變遷甚しく地價の如きは之に依て常に變化を免れませぬ、上海港の如きは他の河川に比しあれだけの濁水を呈する程土砂の沈澱力大なる河ですから常に浚渫を要する事は當然です、現今水深三十呎を保ち大低の大船を入港し得ますが之には潮汐と

相俟て餘程人工を加へる要があり、港内各所に浚渫機が備へられ浚渫局迄設けられ常に浚渫に従事し輸出入船の五分を其費用として負擔する事になつて居ます、容易の事でないと思はれます。

果して然らば上海港は將來永久に商港としての位置を保ち得らる、やの疑問を生ぜしめます、之に付ても既に研究されて居る事で或は商船は無限に船體を増大するものでないから現狀でドックを完備すればよいと云ひ或は船體の増大と共に入港不能となるを免れないから、他に築港之に備へるがよいと云ひ、若し築港するには黃浦江口の昔の港たる吳淞が適當だと云ふ説もあります、然し後説を實現するにせよ折角完備した上海繁華の中心が移動する事にならねばならぬし大に研究を要する事だらうと思ひました。

要するに楊子江口を船から觀ま、ただけでも、濁流の洋々二百哩に及ぶ有様から推しまして、其土砂の運搬並に沈澱作用の如何に偉大なるかを考へしめます、太平洋大觀の著者が楊子江作用の偉大を述べて將來楊子江口を我が九州と陸続きとなると申して居ます、夫は尙遠き將來の想像と致しても沈澱作用の如何に大なるかを察するに餘ありと考へました、斯る處に位せる上海港でありますから其變化の急忽なる蓋し想像以上であらうと觀察しました、斯る危險な港であるにも拘はらず香港と共に東洋有数の港として發達し得るのは全く楊子江流域と云ふ東洋第一の物資產出地を控へ、上海は其の門戸として之に代る可き場所のない爲めであります。